

医師との連携により迅速な輸血対応が可能であったダラツムマブ使用患者の1例

◎大嶋 慎也¹⁾、尾崎 文彦¹⁾、吉森 之恵¹⁾、岡田 有以¹⁾、井口 佳代子¹⁾、余語 保則¹⁾
トヨタ記念病院 臨床検査科¹⁾

【はじめに】ダラツムマブ（以下 DARA）は CD38 に作用する IgG 型ヒトモノクローナル抗体であり、多発性骨髄腫の治療に用いられる。しかし CD38 は赤血球膜表面上にも発現しているため間接抗グロブリン試験（以下 IAT）等の輸血検査に影響することがある。DARA の偽陽性はジチオトレイトール（以下 DTT）処理により影響が低減するが、DTT 処理には 1 時間程度かかり、輸血の遅延が生じる恐れがある。今回、DARA 投与患者において医師との連携により迅速な輸血対応が可能であった 1 例を経験したので報告する。【症例】70 歳代女性、A 型 RhD 陽性。多発性骨髄腫疑いで当院紹介。化学療法を行うも治療効果が得られず DARA を新規投与開始。【経過】事前に DARA 投与に関する輸血検査上のリスクを血液内科と共有できていたため、DARA 投与可能性の時点で医師から患者情報が展開、その後使用決定時に使用計画の詳細情報も共有、輸血部より採血や検査計画を提案し了承された。また DARA 投与前に不規則抗体検査も実施し陰性を確認した。患者は DARA 投与中に計 6 回、12 単位の輸血が行われたが、いずれも輸血提

供に大きな遅延は生じなかった。また輸血後新規の不規則抗体産生は認めなかった。最終的に治療は奏功せず患者は緩和療法を選択、退院後自宅にて永眠された。【考察】本症例が当院での DARA 使用輸血患者第 1 例であった。日本輸血・細胞治療学会から DARA による IAT 偽陽性発生、及びその対処法が通達された際、DTT 処理含む事前検査の必要性を検討した。その中で血液内科と輸血部によるディスカッションを行ったことで、迅速で正確な情報共有のもとでの事前検査体制構築が可能となり、DARA 使用第 1 例からの迅速な輸血対応も可能であった。DARA は投与後 6 ヶ月程度偽陽性反応が残存するとされており、DARA 使用履歴が院内だけでなく他院でも確認できる事が望ましい。当院では 2022 年 4 月より輸血カードの配布を開始した。輸血カード利用により院内、院外問わず迅速な検査、輸血対応が可能となることが期待される。【まとめ】DARA 患者で迅速な輸血を行うためには医師との連携を密に行い、また技師間で知識、技術を共有することが重要である。
連絡先：0565-24-7244